

特31  
275

小學  
校用  
兵庫縣史談  
甲卷

025620-000-7

特31-275

兵庫縣史談 (小學校用) 甲卷

中根 雅之助/著

M28

ADC-3119





小學校  
兵庫縣史談  
甲卷

緒言

一 郷土史ヲ授クルニハ先ツ其學校ノ沿革盛衰ヨリ市町村ノ史事ニ及ボシ以テ本書所載ノ事項ニ進ムベキモノトス、

一本縣ノ管轄ハ五國三十三郡ニ跨リ且ツ孰レモ史談ニ密ミタルノ國ナルカ故ニ其特ニ著名ナルモノト雖殆ンド枚擧ニ遑アラザルナリ

然ルニ學校ニ於テハ定限ノ時日ニ學習セザルベカラザルヲ以テ本書ハ其最モ顯著ナルモノヲ採擧シ其事蹟ニツキ上古ヨリ年代ヲ逐フテ之ヲ排列シ以テ全縣下ニ關セル史談ヲ學ヒ易カラシメ稍便宜上之ヲ

四卷ニ別チ甲ハ攝津、乙ハ播磨、丙ハ淡路、丁ハ但馬丹波ノ各地方ニ適當セシメタリ而シテ更ニ其國內ニツキ自己ノ郡市ニ關連セルモノヨリ始メ漸次全管内ニ及バル、ハ毫モ妨ナカルベシ、

一 本書ハ高等科第一學年ノ前期ニ用フベキモノナレバ其後期ニ於テ日





緒言

一 郷土史ヲ授クルニハ先ヅ其學校ノ沿革盛衰ヨリ市町村ノ史事ニ及ボ  
 シ以テ本書所載ノ事項ニ進ムベキモノトス、  
 本縣ノ管轄ハ五國三十三郡ニ跨リ且ツ孰レモ史談ニ審ミタルノ國ナ  
 ルカ故ニ其特ニ著名ナルモノト雖殆ンド枚擧ニ遑アラザルナリ  
 然ルニ學校ニ於テハ定限ノ時日ニ學習セザルベカラザルヲ以テ本書  
 ハ其最モ顯著ナルモノヲ採擷シ其事蹟ニツキ上古ヨリ年代ヲ逐テ  
 之ヲ排列シ以テ全縣下ニ關セル史談ヲ學ビ易カラシメ稍便宜上之ヲ  
 二別チ甲ハ播磨、乙ハ播磨、丙ハ波路、丁ハ但馬丹波ノ各地方ニ  
 適當セシメタリ而シテ更ニ其國內ニツキ自己ノ郡市ニ關連セルモノ  
 ヨリ始メ漸次全管内ニ及バル、ハ毫モ妨ナカルベシ、  
 一 本書ハ高等科第一學年ノ前期ニ用フベキモノナレバ其後期ニ於テ日





本歴史ヲ學ブニ當リ連絡シ易カラシメンガ爲既ニ教科用書トシテ採  
定セラレタル小學日本歴史ニ倣ヒ人名ヲ以テ項目ヲ分ケ其事蹟ヲ編  
述シタリ、

一史談ヲ學ブニハ地誌ト並行スベキモノナレバ常ニ地圖ヲ展ベ其沿革  
變遷ノ如何ヲ想像セシムベシ、  
一本書ハ修身科ト相連絡セシメ、勅語ノ趣旨ヲ貫徹セシメンコトニ努  
メタリ又兒童ヲシテ其記憶ヲ強固ナラシメンニハ圖畫ニ若クモノナ  
キヲ以テ本書ハ挿圖ニ最モ注意シ聊編者ガ苦心ニヨリ表出シタルモ  
ノナレバ教授者幸ニ其意ノ在ル所ヲ酌察セラレ以テ其實効ヲ奏セラ  
レンコトヲ希望ス

明治二十八年七月十日

編者識

小學  
校用

# 兵庫縣史談 甲卷

## 目次

- |     |      |
|-----|------|
| 第一章 | 發端   |
| 第二章 | 攝津史  |
| 第一課 | 神功皇后 |
| 第二課 | 僧行基  |
| 第三課 | 阿保親王 |
| 第四課 | 多田滿仲 |
| 第五課 | 源賴光  |
|     | 平清盛  |



第六課	源平ノ合戰
第七課	楠正成
第八課	小山田高家
第九課	細川高國
第十課	荒木村重
第十一課	僧契沖
第三章	播磨史
第十二課	億計王
第十三課	藤原惺窩
第十四課	大石良雄
	弘計王

第四章	淡路史
第十五課	反正天皇
第十六課	僧明晃
第十七課	高田屋嘉兵衛
第五章	但馬史
第十八課	神谷轉
第十九課	南八郎
第六章	丹波史
第二十課	波多野秀治
第七章	結論
	多田彌太郎

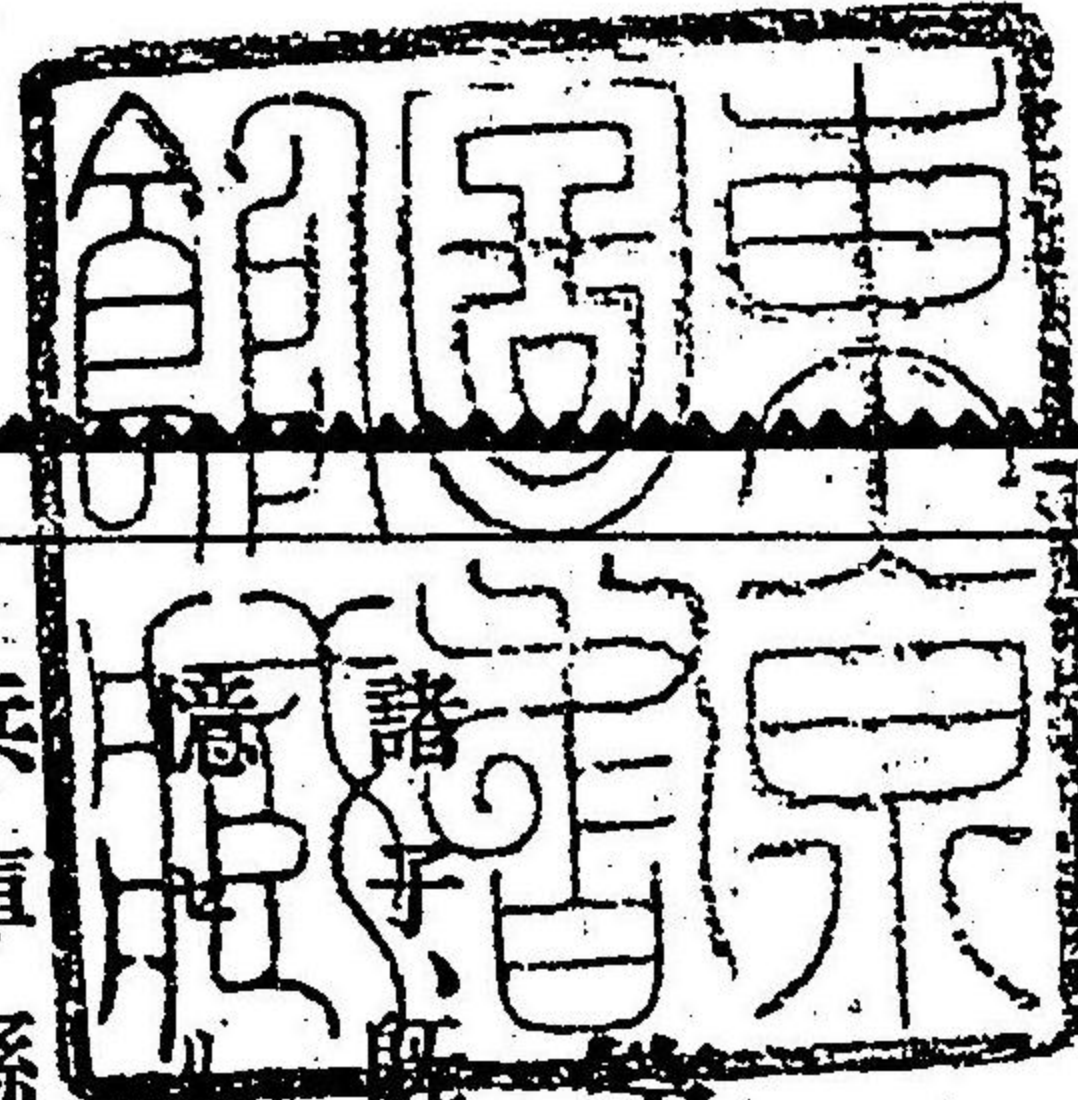


小學  
校用  
兵庫縣史談 甲卷

中根雅之助  
小野辰太郎  
合著

第一章 發端

諸子、既ニ我ガ學校ノ沿革並ニ近傍ノ物語ヲ記  
意セリ、今ヨリ進ミテ、縣下ノ史談ヲ學ブヘシ、我  
兵庫縣ハ、日本全國ノ殆ンド真中ニ位シ、畿内、中  
國ニ跨リ、交通頗ル便利ナル地方ニシテ、海濱ハ  
何レモ景色ヨロシク、漁業ノ益アリ、市邑ハ商業





盛ニシテ、山林ハ樹木茂リ、田畝ハ遠ク開ケ、五穀  
豊カニ、最モ幸福ナル郷土ナルヲ知ルベシ、ソモ  
管内ハ攝津ノ西部、播磨、但馬、淡路ノ三國ト、丹波  
二郡トノ廣キニ亘リ、縣知事アリ之ヲ統轄セラ  
ル、サテ遠キ昔ヨリ今日ニ至ルマテニ起リシ國  
内ノ有様ニツキ左ニ語り聞スベシ。

## 第二章 攝津史

攝津ハ畿内ノ中ニテ、海ニ臨メル地方ニシテ、舟  
ノ出入ニヨキ、所多キニヨリ、昔ハ津ノ國ト云ヒ  
シガ、後津ト津ト相接スルノ意ニヨリ、攝津ト改

メラレタリ、皇祖神武天皇ノ東征シ給ヒシ時、  
始メテ御舟ヲ此地ニ着ケサセラレタリ、現時東  
部ハ大阪府ニ屬シ、八部、菟原、武庫、川邊、有馬ノ五  
郡、本縣ノ支配セララル、所トナル。

## 第一課 神功皇后

神功皇后ハ 仲哀天皇ノ御后ニシテ、此御世ニ  
九州ノ熊襲謀叛シケレバ、天皇自カラ御征伐  
アリシガ、陣中ニテ崩御シ給ヒヌ、皇后ハ今ノ  
朝鮮ノ地ニ新羅トイヘル國アリ、ヒソカニ熊襲  
ノ味方ヲナシケルヲ察シ給ヒ、紀元八百六十年



御自カラ男子ノ装ヲナシ大將トナラセラレ、不  
意ニ彼ノ地ニ渡ラセ給ヒケレバ、新羅王ハ、其御  
威ニ怖レ、高麗、百濟ノ二國王ト共ニ降参セリ、此  
三國ヲ三韓トイフ、熊襲亦平ラギ、皇后ハ凱旋  
シ、長田ノ沖ヨリ上陸シ給ヒ、事代主尊ヲ此地ニ  
祭ラセ給フ今ノ官幣小社、長田神社是ナリ、士卒  
ヲシテ甲冑ヲ脱ガセシメ、武庫山ノ麓ニ、其甲六  
ツヲ埋メシメ、六甲山ノ名ヲ止メ給フ、翌年稚日  
雲尊ヲ生田ノ里ニ祭ラセラル、即チ官幣小社生  
田神社ナリ、又官幣大社廣田ノ宮モ此時ニ祀リ

玉ヒケリ

## 第一課 僧行基 同空海

僧行基ハ和泉ノ人ナリ、紀元千四百年ノ頃、深ク  
佛法ヲ修メ、諸國ヲ巡遊シテ、人民ノ水利、運漕ノ  
道ヲ教ヘ、大ニ國利ヲ興シケリ、聖武天皇大菩  
薩ノ號ヲ授ケ賜フ、川邊郡昆陽ノ池ハ行基ガ田  
畝ノ灌溉ニ便ナラシムル爲メニ作ラセケルモ  
ノニシテ池傍ニ碑アリ、辻ノ碑ト稱ス。  
空海ハ讃岐ノ人ニシテ、亦佛道ヲ研メ、其奥義ヲ  
修メントシ、唐ニ留學スルニ當リ、摩尼山ニ登リ



大龍寺ニ於テ求法ノ誓ヲナシ、幾クモナクシテ唐ニ入り其教ヲ得テ歸朝シ、再ビ此山ニ登リ、往年ノ誓ヲ遂グ、是ヨリ再度山ト稱スルニ至レリ、空海、後紀伊ノ國高野山ニ一寺ヲ建立シ金剛峰寺ト名ク。

### 第三課 阿保親王

阿保親王ハ平城天皇ノ皇子ナリ、文學武藝ニ長シ、又力強ク和歌ニ巧ミナリ、伴建岑、橘逸勢ノ謀、反セントスル時、上書シテ其變ヲ奏問シ、其功ニヨリ一品ニ叙セラル、菟原郡打出ノ里ニ住マ

セラレタリ、天長年中上表シテ其子ニ姓ヲ賜ハラントナ請ヒ、其子行平、業平ニ在原ノ姓ヲ賜ハル、二子共ニ和歌ヲ善クス、業平嘗テ武藏ニ遊ビ隅田川ノ水鳥ヲ詠ゼラル、世唱ヘテ絶美トス其歌ニ曰ク、

名にしねはゝ、いさことゝはむ都鳥、

わかおもふ、人はありやなしやと。

### 第四課 多田滿仲 源賴光

源氏ノ先祖ハ六孫王經基ト云ヒ、朱雀天皇ノ御世平將門、藤原純友ノ謀叛セシ時、功ヲ立テ後



鎮守府將軍トナリ攝津ノ多田莊ニ居ル其旗白  
キヲ用フ、子孫其地ニ住ゼシモノ世ニ攝津源氏  
ト稱ス。

多田滿仲ハ、經基ノ長子ニシテ武勇アリ、嘗テ謂  
ヘラク、武臣 天子ヲ護衛シ奉ルニハ、名刀ナカ  
ルベカラズトテ、筑前ヨリ良キ鍛冶ヲ呼ビ出ダ  
シ、鍛鍊セシムルコト、六十日餘ニシテ二刀ヲ得  
タリ、之ヲ試ミシタメ死刑ノ囚人ヲ斬ルニ、一ハ  
其鬚ヲ截リ、一ハ其膝ヲ斷ツ、因テ截鬚、膝圓ト名  
ヅケ、寶刀トシテ子孫ニ傳ヘシム。

源賴光ハ滿仲ノ長子ニシテ、武勇ノ名高シ射ヲ  
善クス、或夜弟賴信ノ邸ニ至ル、囚人アリ之ヲ問  
フニ鬼同丸ト云フモノナリト、賴光曰ク彼レ多  
力ノモノ、嚴シク繫クベシト、賴信更ニ鉄ノ鎖ヲ  
以テス鬼同丸之ヲ聞キ大ニ怨ミ、即チ鎖ヲ斷チ  
テ逃レ賴光ヲ討タントス、其隙ヲ得ス、賴光鞍馬  
ニ赴カントシ、市原野ヲ過グ、怪シキ牛ノ斃ル、  
チ見ル、家來ニ之ヲ射セシムレハ、牛忽チ立ツト  
思ヘバ鬼同丸刀ヲ奮フテ飛ビ出ツ、賴光直チニ  
之ヲ斬ル、又大江山ニ強賊アリ其勢強シ賴光



勅命ヲ奉シ家來數人ヲ從ヘ山ニ入り之ヲ殺ス、  
人皆其武勇ニ服ス。

### 第五課 平清盛

平清盛ハ武功ヲ重キ太政大臣トナリ、朝廷ノ威  
權ヲ弄シ、其勢朝日ノ昇ル如クナリシガ、常ニ兵  
庫ノ地ヲ愛シ、都ヲ此地ニ遷サントス、諸國ノ船  
難波ヨリ至ルモノ、此沖ニ覆ガヘルコト多シ、清  
盛之ヲ患ヒ港ヲ築キ、此難ヲ防ガントシ、湊川ノ  
流レヲ東ニ移シ、海ヲ埋メ其工事ヲ成サシム、既  
ニシテ風波ノタメニ破ラル、コト二回ナリ、時

ニ阿部泰氏ト云ヘルモノ曰ク是レ海神ノ容レ  
ザル所ナリ、若シ人ノ柱ヲ築カバ成就セント、依  
テ生田ニ關ヲ設ケ無慘ニモ往來ノ人ヲ捕フニ  
至ル、其悲嘆ノ聲晝夜絶エズ、家童松王ナルモノ  
之ヲ憐ミ一命ヲ以テ代ランコトヲ請フ、清盛之  
ヲ許ス、松王白馬ニ白キ鞍ヲ置キ自カラ海底ニ  
沈ム、即チ石材ヲ其上ニ積ミ埠頭ヲ築ク、現今其  
遺跡ヲ築島寺ト云フ

治承四年六月、清盛 安徳天皇ヲ奉シテ都ヲ福  
原ニ移シ、弟賴盛ノ第ヲ皇居トス、市坊ヲ區分ス



ルニ一條ヨリ五條マテヲ得ルノミ、頗ル狭ク不自由ナリケレバ、評判宜シカラス、時ニ源氏ノ兵諸國ニ起ル、我慢強キ清盛モ、大ニ憂ヒ公卿ヲ集メテ、新舊ノ都ニツキ、其便不便ヲ謀ル、多クハ皆其威光ニ怖レテ口ヲ開クモノナシ、藤原長方獨リ福原ノ不便ヲ説ク、清盛モ悟ル所アリケルニヤ、其年十一月終ニ舊都ニ復シ、程ナク熱病ニ罹リテ死ス。後遺骨ヲ築島寺ニ埋ム

### 第六課 源平ノ合戦

清盛己ニ死シケレバ、平氏ノ威勢、俄カニ衰へ、源

頼朝ハ其機ニ乗シ、二弟範頼、義經ヲシテ京師ヲ攻メシム、宗盛一門ヲ引連レ、安德天皇ヲ奉シ、一ノ谷ニ城ヲ構へ西門トシ、生田ヲ東門トシ、嚴重ニ備ヘテナシタリシガ、範頼ハ東門ニ向ヒ、義經ハ土肥實平ヲシテ西門ヲ攻メシメ、自分ハ部下ヲ率ヰテ間道ヨリシ、城ノ背ナル鶺越トテ鹿ナラデハ至ルヲ得ザル程ノ難所ヨリ落ルガ如クニ不意打ヲナシタリシカバ、平氏ノ狼狽混雜言フバカリニアラズ、争フテ舟ニ乘リ讃岐ノ屋島ニ走リタリ。





長谷川盛俊ノ中ノ送

時ニ源氏ノ一將、熊谷直實、敵ノ若武者一騎海ヲ  
 渡ラントスルヲ見テ之ヲ呼返シ、其首ヲ獲タリ、  
 腰ニ笛ヲ挿ムアリ、其敦盛ナルヲ知り、笛ト首級  
 ナ父經盛ニ送ル。  
 薩摩守平忠度明石ノ方ニ赴カントス、東軍ノ將  
 岡部忠澄ト戦ヒ之ヲ伏セ、既ニ刺サントセシニ、  
 忠澄ノ従者來リ終ニ殺サル忠澄未ダ其誰タル  
 ナ知ラズ甲ノ中ニ左ノ歌稿アリ因テ其忠度ナ  
 ルコトヲ詳ニス  
 行かれて、このしたかげを宿とせば、



花やこよひのあるじならまし、

此ノ日東門ノ戦始ルノ時、源氏ノ部下ニ河原高直兄弟アリ、先陣トナリテ進ミシガ、敵將眞鍋助光ノ矢ニ射ラレテ死ス、梶原景季亦東門ヨリ入り、箆ニ梅花ヲ插ミ、多クノ敵ニ圍マレ、勇シク戦ヒタリ。

### 第七課 楠正成

北條高時政ヲ治メス、人心ヲ失フニ至リシカバ、後醍醐天皇朝廷ノ權ヲ復セントシ、北條氏ヲ亡ボスノ手筈ヲ謀リ給ヒシニ、却リテ高時ノ兵

ヲ受ケ、笠置山ニ幸シ給ヒ、河内ノ士、楠正成ヲ召シ、大事ヲ托シ給フ、正成召ニ應ジ、直チニ御前ニ出テ、叡慮ヲ安ンジ奉ルベキ由ヲ奏上シ、歸リテ、勤王ノ兵ヲ擧グ、然ルニ天皇ハ敵ノ爲メ隱岐ニ遷幸セラレシガ、正成ハ金剛山ノ千早城ニ賊ノ大軍ヲ惱マシケレバ、天下ノ武士義兵ヲ起スモノ追々多クナリ、新田義貞、遂ニ鎌倉ヲ攻メ高時ヲ亡ボス、天皇京師ニ還幸セラル正成兵庫ニ奉迎ス、勅シテ前驅セシム、天下ノ政朝廷ニ返リシニ足利尊氏叛キ、一タビ敗レテ西國ニ走



リシガ、間モナク大軍ヲ率テ海陸二手ニ分レ  
 都ニ攻メ上リケリ、天皇正成等ヲシテ出デ、  
 防ガシム、正成良キ謀ヲ上リシモ、佞人ノタメニ  
 用ヰラレス、正成今ハ事ノナスベキナキニヨリ  
 子正行ヲ召シ、遺訓ヲナシ、湊川ニ出陣シ、大ニ賊  
 軍ヲチヤマシ、廣巖寺ニ入り自殺ス、死ニ臨ミ弟  
 正季ニ問フテ曰ク、死シテ何ナカスルト、正季答  
 テ曰ク七タビ人間ニ生レテ國賊ヲ滅サント、正  
 成喜ビ相刺シテ死ス、元祿四年水戸ノ藩主、徳川  
 光圀、碑ヲ立テ嗚呼忠臣楠子之墓ト題シ、明ノ人





朱之瑜ナシテ碑文ヲ撰セシメ裏面ニ刻ス、明治  
維新ノ後嗣ヲ建テ別格官幣社ニ列シ湊川神社  
ト稱ス

天皇御蓋ヲ正成ニ賜ヒ御手カラ菊花ヲ泛ベ  
給ヒ詔シテ曰ク菊ハ遐齡ヲ保ス此ヲ以テ其功  
ヲ成セト正成感拜シテ退キ徽號トナス菊水ノ  
旗此ヨリ始ルト云フ。

### 第八課 小山田高家

和田岬ノ官軍敗レ、正成戰死シケレバ、新田義貞  
自ラ殿シテ、求女塚ニ到ル、馬殘レ徒歩シテ塚上

ニ登ル、敵兵群リ射ル義貞二刀ヲ揮ヒ十六箭ヲ  
截リ頗ル危ウシ、部下ノ一將小山田高家、遙カニ  
之ヲ見テ走セ來リ、馬ヲ義貞ニ授ケ、自カラ奮戰  
シテ之ニ死ス、義貞僅カニ身ヲ以テ免カル、ユ  
トヲ得タリ、

義貞ノ白旗城ヲ攻メシ時、陣中糧食不足トナリ  
シカバ高家其兵卒ナシテ、廣山莊ノ青麥ヲ刈ラ  
シム、村民之ヲ義貞ニ訴フ、義貞人ヲシテ其陣ヲ  
探ラシムルニ、糧食ナシ、義貞曰ク之レ吾カ罪ナ  
リ、然レドモ法ハ重ク、將ハ失フベカラズト、爲メ



ニ田主ニ償ヒ、高家ヲ咎メズ、高家深ク其恩ニ感  
シ報効ヲ期シ是ニ至リテ忠死ス。

### 第九課 細川高國

足利氏ノ政少シク衰ヘシヨリ、一門家臣ノ争ヲ  
生シ父子兄弟相戦フニ至リ甚シキハ家臣ノ其  
君ヲ害スルモノアリ、人道全ク廢レテ實ニ淺間  
シキ世ノ中トハナレリ、時ニ當國ノ領主、細川高  
國、其義父政元、時ノ將軍義植ヲ廢シ、義澄ヲ立ツ  
ルニ及ヒ、高國又政元ヲ怨ムコトアリシカハ、義  
植大内義興ニ擁セラレテ、京師ニ入ルトキ、共ニ

兵ヲ率井義澄ヲ追フ、義興政元ニ代リテ管領ト  
ナリ、既ニシテ國ニ歸ル、高國之ニ代リ是ヨリ屢  
々戦ヒ、其威勢大ニ加ハリシカバ、義植之ヲ厭ヒ  
爲メニ淡路ニ奔ル、既ニシテ細川晴元ト戦ヒ、遂  
ニ之レニ死ス、高國平生文ヲ好ミ又和歌ニ巧ナ  
リシトイフ、是ヨリ天下ハ麻ノ如ク亂レ豪傑諸  
國ニ起リ戦争止ムコトナカリキ。

### 第十課 荒木村重

戰國ノ世諸將ノ中ニ織田信長、尾張ヨリ起リ遂  
ニ足利氏ニ代リシカ、荒木村重、信長ニ歸シ攝津



守トナル信長明智光秀ノ讒言ヲ信シ、村重ヲ殺  
サントス、村重其情ヲ知り伊丹ニ據リテ反旗ヲ  
翻ヘス、羽柴秀吉交リ深カリシカバ、單騎其城ニ  
至リ、懇切ニ之ヲ諭ス、其臣秀吉ヲ殺サントス、村  
重聞カス、彼我家ノ亡ントスルヲ憫ミ我カ害心  
ナキヲ見テ、特ニ來ルモノナリ、朋友ノ義失フベ  
カラスト厚ク秀吉ニ謝シ去ルニ至リ相携ヘテ  
城外ニ送リ相與ニ別テ惜ミシト云フ、信長大軍  
ヲ以テ之ヲ圍ミ城陥リ荒木氏亡ビケリ。

### 第十一課 僧契冲

僧契冲ハ川邊郡ノ人、姓ヲ下河ト稱ス、恭謙ニシ  
テ人ニ下ル、五歳ノ時、母口スカラ百人一首ヲ教  
ヘシニ、十日ニシテ記憶セシト云フ、十三歳、佛門  
ニ入り母ニ孝養ヲ盡クス、徳川光圀、大日本史ヲ  
編スルニ及ヒ公ノ爲メニ、萬葉代匠記廿卷、惣釋  
二卷ヲ著ハシテ獻ゼシカバ、公卓見ヲヨロコビ  
銀千兩、絹三十匹ヲ賜ヒシガ、盡ク之ヲ貧民ニ與  
ヘタリ、加茂真淵、本居宣長等ト國學ノ三偉人ト  
稱セラレ、著書亦少ナカラズト云ヘリ、

### 第三章 播磨史



播磨ハ 神功皇后新羅ヲ征伐シ給フノ時、雨降  
リケレハ、此地ニ待テ玉ヒシニヨリ、晴間ノ國ト  
名ツケシト唱ヘ或ハ 皇后ノ凱旋ニ當リ一丈  
餘ノ萩生シケレバ、其所ニ井ヲ穿タシメ、針間井  
ノ國ト稱セシト云フ、

### 第十二課 億計王 弘計王

安康天皇ノ三年、大泊瀬皇子ノ眉輪王ヲ誅シ給  
ヒケル時、諸皇子害セララル、市邊押磐皇子モ亦  
殺サレ給ヒ、二孤 億計弘計ノ二王難ヲ避ケ播  
磨ノ縮見ノ屯倉ノ首忍海部細目ノ家僮ト爲ラ



細目ノ家ニ宴ス





セラル、會々國司來目部小楯、其家ニ宿ル、細目之  
ヲ饗シニ王ヲシテ舞ハシム、二王、相讓ルコト久  
シ、弘計王心ヲ決シテ起テ歌ニヨリテ其系由ヲ  
述ブ、小楯大ニ驚キ、急ニ殿舎ヲ築キ、京師ニ奏ス、  
清寧天皇皇子ナキニヨリ、大ニ喜バセラレニ  
王ヲ宮中ニ迎へ、億計王ヲ立テ、皇太子トス、  
天皇崩シテ皇太子 弘計王ノ功アリシヲ以  
テ、位ヲ讓リ給フ、弘計王位ニ即キ給フ、顯宗  
天皇是ナリ。  
天皇性至孝父君 市邊押磐皇子ノ墳墓ヲ求メ

シメ、近江ノ來田綿ノ畝屋野ニ得テ厚ク改メ葬  
ラセ給フ、天皇崩御ノ後、億計王位ニ登リ、大  
ニ仁政ヲ施シ給フ是ヲ 仁賢天皇ト申ス

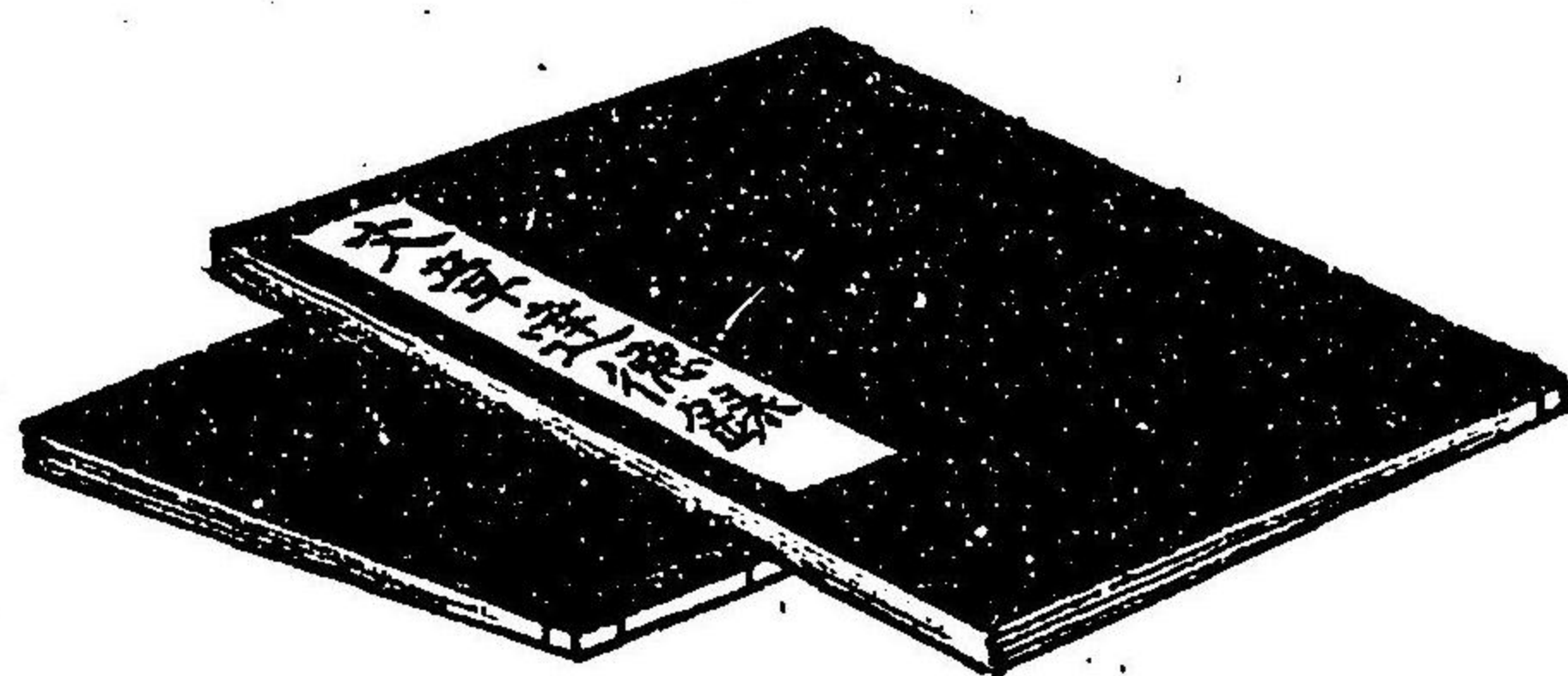
### 第十三課 藤原惺窩

鎌倉將軍、源實朝和歌ヲ好ミ、藤原定家ヲ師トシ  
其永領地トシテ、播磨細川莊ヲ賜フ、子孫世々此  
地ニ住ス、十一世ノ孫爲純ト云ヘルモノ、三木ノ  
城主別所長治ト戰ヒ之ニ死ス、其子、惺窩母ト難  
ヲ京師ニ避ケ僧トナル、既ニシテ儒學ヲ修メ文  
教ヲ以テ天下ヲ治メシコトヲ志ス、徳川家康之





像育生先高惺



ヲ招キ經書ヲ講ゼシム、是ヨリ其名聲著ハレ門人甚ダ多ク海内ノ文教盛ニ興リ太平ヲ致ス明治二十六年朝廷其功ヲ追賞シテ正四位ヲ贈ラ

### 第十四課 大石良雄

元祿十四年三月、時ノ將軍德川綱吉、勅使ヲ饗ス當國赤穂ノ城主、淺野長矩等ニ命シテ、其事ヲ執ラシム、依テ高家吉良義英ノ指圖ヲ受ク、然ルニ義英貪慾ノ性アリ、長矩ノ贈遺ナキヲ含ミ長矩ヲ辱シム、長矩怒リニ堪ヘス殿中ニ義英ヲ傷





長矩怒ラ  
義英、傷ク

義士  
仇ヲ報ス

ツク、將軍直ナニ長矩ニ死ヲ賜ヒ、其領地ヲ沒收  
 ス、老臣大石良雄、先君ノ弟長廣ニ家ヲ繼ガシメ  
 ラレシメ、コトヲ請フ、就ラス、竊カニ同志ヲ集メ、翌  
 年十二月四十六日ヲ率テ江戸本所ナル義英ノ  
 邸ヲ襲ヒ、遂ニ其仇ヲ復シ、官ニ自首ス、幕府之ヲ  
 四藩邸ニ拘置セシメ、翌年二月死ヲ賜ヒ、其遺言  
 ニヨリ高輪泉岳寺ノ長矩ノ墓側ニ葬ル、世人今  
 ニ至リテ賞嘆ス

## 第四章 淡路史

此國ハ上古 伊弉諾伊弉册ノ二尊始メテ見出



シ給ヒケル島ニシテ、其小サキ土地ナリシヲ以テ吾耻トノタマヒシヨリ、遂ニ國名トハナレリト云フ。

### 第十五課 反正天皇 淳仁天皇

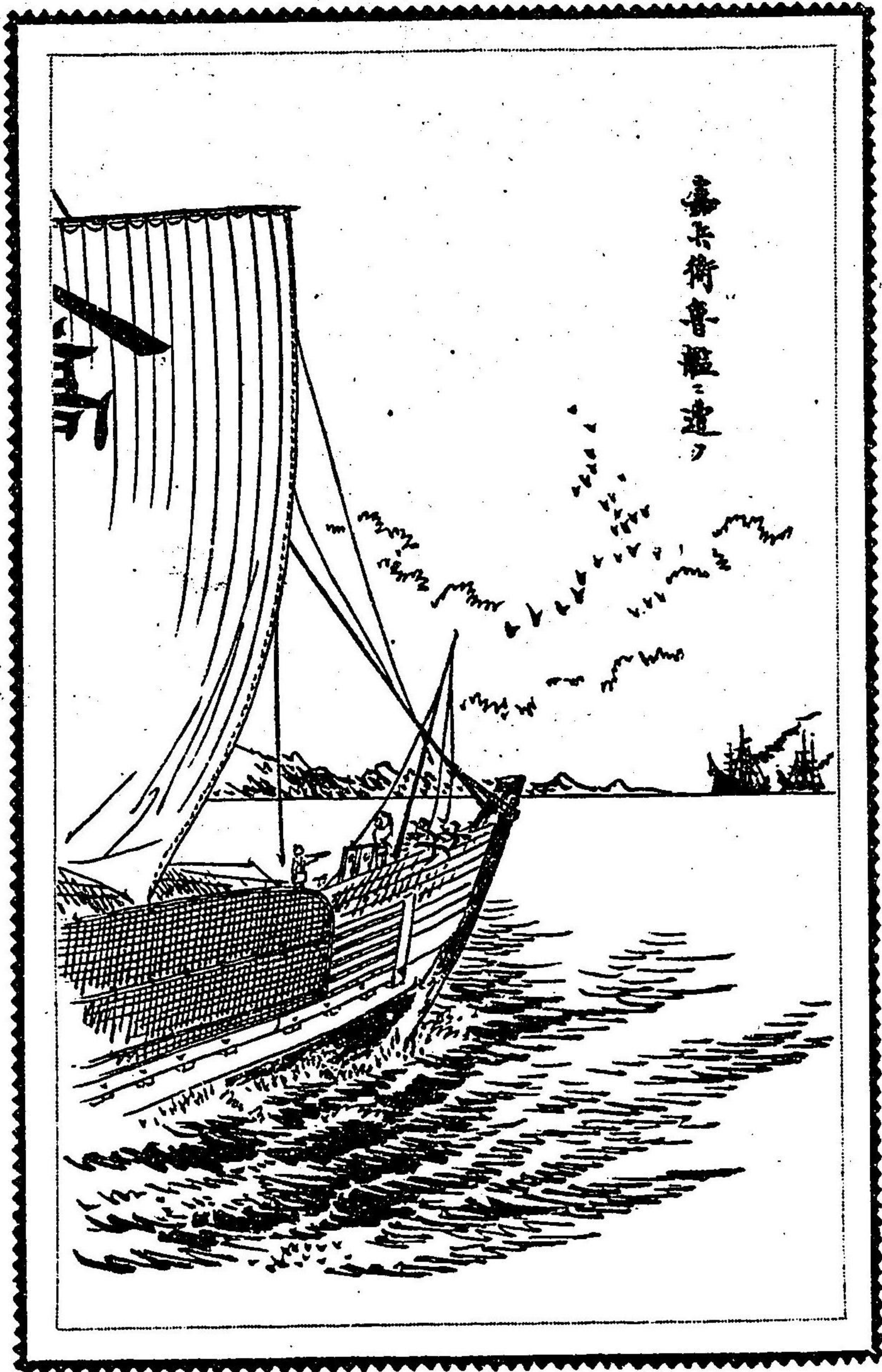
反正天皇ハ、仁徳天皇ノ第三ノ御子ニシテ、淡路、三原郡標田ニ御誕生アリ、其近傍、江尻ノ井水清淨ナリシニヨリ浴湯トナシ給ヒシガ、タマク多遲ノ花井中ニ吹キ來リシカバ、御名ヲ多遲比瑞窗別ト稱シ給フ、現時其宮趾ヲ産宮ト唱ヘ其井ヲ瑞井ト稱ス。

淳仁天皇ハ始メ大炊王ト稱シ奉リシガ、惠美押勝ノ立ツル所トナリ、御位ニ即カセ給フ、時ニ僧道鏡 孝謙上皇ノ寵遇ヲ受ケ、押勝爲メニ其勢衰ヘケレバ遂ニ謀叛シテ誅ニ伏シ、カバ上皇ハ 天皇モ押勝ニ黨シ給フナラントノ御疑ニヨリ、遂ニ 天皇此地ニ徙サセラレ給ヒ、憂憤ノ餘リ崩御セララル、世ニ淡路廢帝ト稱シ奉リシカ、明治維新ノ後、淳仁天皇ノ謚號ヲ奉ラレタリ。

### 第十六課 僧明晁

僧明晁ハ、津名郡物部村ノ人ナリ、幼ニシテ孤ト





ナリ佛門ニ入ル性畫ヲ好ミ常ニ筆紙ヲハナタズ、師僧之ヲ戒ム長ズルニ及ビ大道上人ニ從ヒ京都東福寺ニ住ミ、益々其道ニ志ス、後遂ニ精妙ヲ究ムルニ至ル、現時東福寺ニ存在スル涅槃ノ圖世ニ著ルシ、明晁ノ畫キシモノハ古今ニ稀ナル妙筆ニシテ西洋人モ賞賛シテ東洋美術家ノ巨擘トナス其東福寺ノ殿司タリシヲ以テ世ニ晁殿司ノ名アリ、

**第十七課 高田屋嘉兵衛**

高田屋嘉兵衛ハ津名郡都志村ノ人ナリ寛政十



一年徳川幕府蝦夷ノ地ヲ治メントシ、航路ノ精  
シキモノヲ募集ス嘉兵衛其舟子トナリ國後、擧  
捉等ノ諸島ニ赴キ土民ニ漁具ヲ與ヘ其業ヲ奨  
勵シケレバ土民等皆之ニ服セリ、文化ノ頃魯西  
亞國我北邊ヲ侵シ、爲メニ彼我ノ人ヲ拘ヘ互ニ  
交渉ノ事起ル、嘉兵衛亦捕ハレ彼ノ國ニ至ル、船  
將ト相知ルヲ以テ委シク國情ヲ語り大ニ我國  
威ヲ顯ハシ歸リ爾後國家ノ爲メニ盡力スルユ  
ト勲ナカラス、嘉兵衛常ニ舍ノ船標ヲ用ユ、外國  
船モ之ヲ洋中ニ見テ避ケシト云フ、文政十年病

ニカ、リテ歿ス、年五十九、嘉兵衛性仁慈ニシテ  
豪膽ナリ、資産頗ル富ミ其名海外ニ聞ユ、常ニ公  
共ノ利便ヲ謀リ、港津ヲ修築シ貧民ヲ恤ミ其功  
績甚タ多シ、

## 第五章 但馬史

但馬ハ全國山路險ハシキ所多ク、馬ニテ行カザ  
レバ通ヒ難キヲ以テ達馬ノ國ト呼ビシト云ヒ、  
應神天皇ノ御世、馬ヲ此國ニ放テ飼ハサセ給  
ヒ多ク殖エシニヨリ多馬ノ國ト唱ヘシヨリ、轉  
化セシモノナリトモ云ヘリ。



## 第十八課 神谷轉

神谷轉ハ、出石ノ城主仙石久利ノ家臣ナリ、其國老仙石親友逆心アリ、種々ノ奸計ヲ行ヒ、遂ニ城主ノ父久道ヲ毒殺シ、尋テ久利ヲモ失ヒ我子ヲ立テ、主家ヲ横領セントス、時ニ久利江戸邸ニ在リ、竊ニ人ヲシテ之ヲ殺サシメシモ事成ラズ、轉忠勇ノ士ニシテ頗ル謀略ニ長ズ、克ク奸臣ノ實情ヲ探知シ、失踪シテ虛無僧ノ姿ト變シ寺ニ隠レ、機ニ乗シ以テ奸臣ヲ除カシテ圖ル、親友轉ガ亡命ヲ聞キ、後患ヲ憂ヘ幕府ノ吏ニ請ヒ

テ之ヲ捕ヘシム、轉縛セラレ法庭ニ出デ具サニ親友等ノ罪惡ヲ陳述ス、幕府審判シテ遂ニ其正邪ヲ判別シ久利ノ封ヲ削リ親友等ヲ罪ニ處ス世ニ之ヲ稱シテ、仙石驥動ト云フ、時ニ天保六年九月ナリ、此事變ニヨリ家臣相奮ヒテ主家ノ名聲ヲ復セシコトヲ努メタリトゾ、

## 第十九課 南八郎多田彌太郎

嘉永ノ頃、外國通商ヲ求ムルニ當リ、國內驥ガシク勤王ノ志士各所ニ起ル、長州ノ士南八郎、福岡ノ士平野次郎薩州ノ士美玉三平等澤宣嘉卿ヲ



奉シテ主將トシ、生野代官所ヲ襲ヒ吏ヲ殺シ、金  
 穀ヲ奪ヒ、士兵ヲ募リテ、妙見山ニ據ル、幕府ノ奸  
 臣ヲ誅シ國家ニ盡ス所アラント宣言ス、國人  
 之ニ應ズルモノ多ク一時兵力甚ダ盛ナリ、幕府直  
 ナニ姫路豊岡出石等ノ諸藩ニ令シテ之ヲ討タ  
 シム、八郎等寡兵ヲ以テ大軍ヲ破リ、防戦最モ努  
 ムト雖モ遂ニ敗ラレ宣嘉卿窮ニ長州ニ走リ、次  
 郎ハ擒トナル、是ニ至リテ八郎自ラ腹ヲ割キ血  
 ナ以テ旗ニ書シ刀ヲ舍ミ深谷ニ投シテ死ス、  
 此時出石ニ勤王ノ士多田彌太郎アリ夙ニ幕府



平野次郎国臣真跡

たのしくはあはれ極まりなく  
 清く正しくはあはれ極まりなく

清く正しくはあはれ極まりなく  
 清く正しくはあはれ極まりなく

利根

美玉



ナ倒シ朝權ヲ恢復セシメントノ望アリ、常ニ四方ニ往來シテ有志ノ士ト交リ遂ニ八郎等ト共ニ事ヲ舉ゲ軍敗レテ窮ニ慝レ再舉ヲ圖ル  
イツシカ幕府ノ注目スル所トナリ、藩ニ歸ルノ後刺客ノ爲メニ殺サル、明治維新ノ後朝廷其志行ヲ追賞シ從四位ヲ贈ラル

## 第六章 丹波史

丹波トハ、往古山陰道地方ノ總稱ナリシガ、四境山ヲ以テ包マレ、谿谷多キニヨリ、谿端ト名ヅケシモノナリト云ヒ、又伊勢神宮ノ稻ヲ作ルノ地

ナルヲ以テ田庭ト稱セシヨリ、轉化シ來レルモノナリトモ云フ、  
全國ハ現時大半京都府ニ屬シ、多紀、氷上ノ二郡ノミ我縣ノ統轄スル所トナレリ。

## 第二十課 波多野秀治

波多野氏ハ鎮守府將軍藤原秀郷ヨリ出ヅ、其玄孫經範始メテ波多野ト稱シ、世々八上城ニ居ル秀治ハ因幡ノ一族清秀ノ子、宗家嗣ナキニヨリ其家ヲ繼ギ、弟秀尙龜山城ヲ守ル、天正年間明智光秀來リ攻ム秀治固ク守リ、累日抜ケズ、光秀大



ニ怒リ或ハ嚇カシ或ハ諭シ盟書ヲ送り降ヲ勸ム兄弟應ゼズ、是ニ於テ光秀遂ニ母ヲ送り質トス秀治始メテ許諾ス而シテ光秀ニ會セン爲城ヲ出デ、至ル、光秀窮カニ兵ヲ城中ニ伏セ、兄弟ヲ捕ヘ、偽計ヲ以テ母ヲ取返サントス、八上城中其主將ノ返ヘラザルヲ疑フ、既ニシテ秀治傷ノ爲ニ死シ秀尙ハ自殺ス、城中之ヲ聞キ大ニ怒リ、光秀ノ母ヲ樓上ニ縛シ二人ノ兵ヲシテ之ヲ刺サシム、光秀火ノ如クニ怒リ急ニ城ヲ攻ム、城兵盡ク自殺シ波多野氏亡ブ。

## 第七章 結論

明治元年徳川幕府大政ヲ天朝ニ奉還ス、之ヲ明治維新ト云フ、各藩主モ版籍封土ヲ返上シ奉リ世ハ郡縣ノ政治トナリ、公卿大名ハ華族ト稱シ、其家臣ハ士族ト稱シ、其他ノ臣民ハ平民ト稱ス、我管内ノ五國モ或ハ分レ或ハ合セラレ、現時ノ有様トナレリ、明治二十二年市町村制ノ施行アリ、二市三十三郡トナリ、地方自治ノ体全ク備ル、

明治維新ノ始メ神戸港ヲ開カレ、外國トノ通商

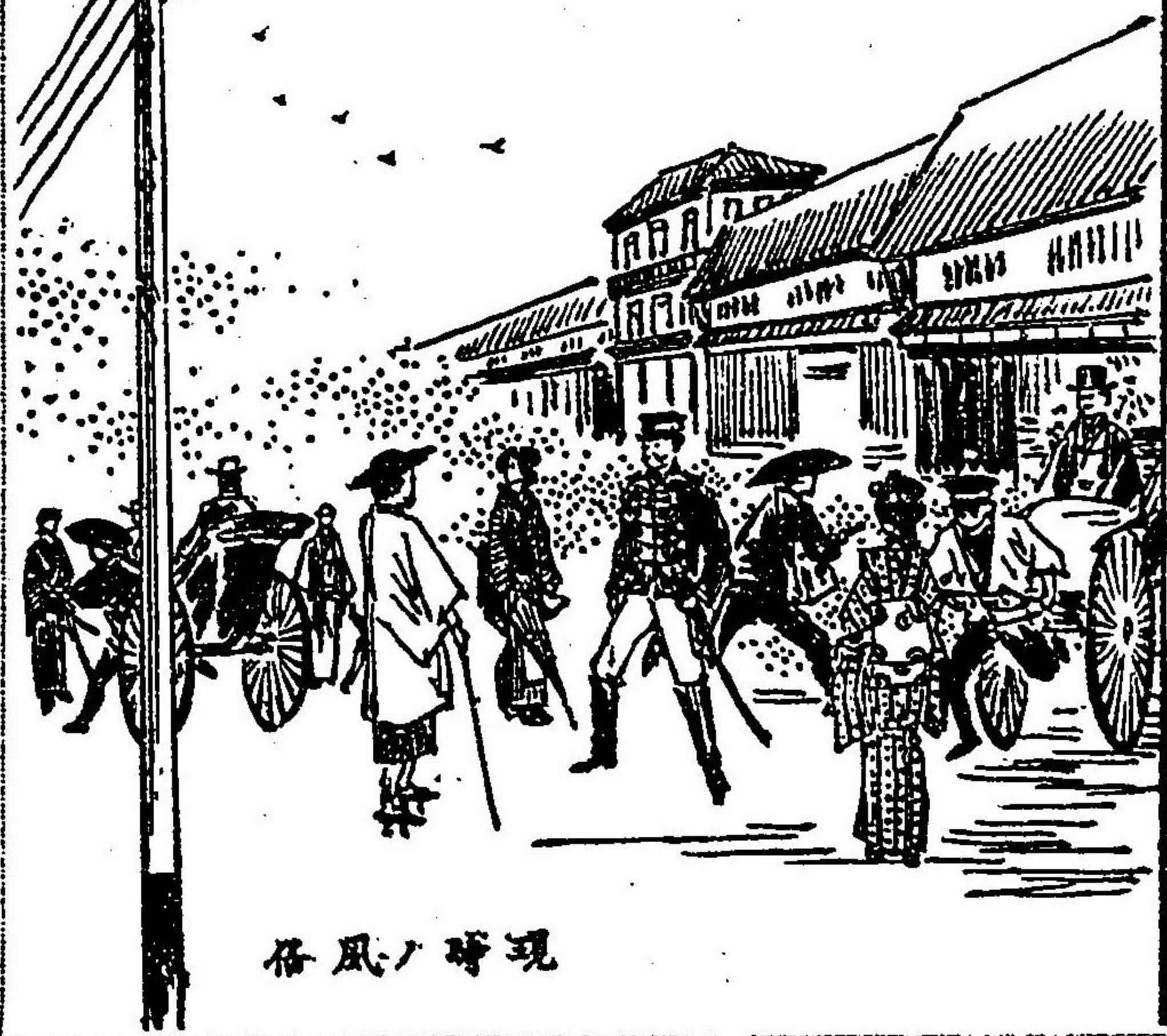


賀易ヲ許サル、是ヨリ西洋ノ文物我が國ニ來リ  
 日進月歩今日ノ開明ヲ見ルニ至ル、之ヲ昔日ニ  
 比スレハ實ニ別天地ノ如シ、サテ西洋人ノ始メ  
 テ來リシハ嘉永年間ノ頃ナリシガ我が船舶モ  
 追々海外ニ往來セザルベカラザルニ至リシヨ  
 リ日章ヲ畫キテ我が國旗ト定メラレタリ、其意  
 匠外人ノ欣慕スル所タリ、諸子等既ニ知レル如  
 ク今日我が大祭祝日ニ至ラバ、寒キ千島ノハテ  
 ヨリ南ハ遠ク琉球ヲ經テ臺灣島ニ及アマデ戸  
 々旭日ノ旗ノ翻ヘラザルハナシ、我が帝國ノ正

封建時代ノ風俗



現時ノ風俗





ニ多望ノ時ニ遭ヒシハ幸福ト云フベシ、諸子今  
ヨリ進ミテ我が國ノ歴史ヲ學ビ此昭代ノ聖恩  
ニ酬ヒ奉ルベキユトナ勉ムベキナリ。

小學校  
用 兵庫縣史談甲卷終



兵庫縣管内古跡畧圖





明治廿八年八月廿九日印刷  
全 年九月一日發行

定價 金拾貳錢

版權  
所有

大 販 賣 所	大 販 賣 所	發 行 所	發 賣 所	印 刷 者	發 行 者	著 者	著 者
熊谷久榮堂	吉岡支店	船井弘文堂	中西市二	赤川孫兵衛	船井文	小野辰太郎	中根雅之助
神戸市元町七丁目	神戸市元町五丁目廿三番邸	神戸市元町四丁目百〇六番邸	神戸市元町三丁目四百卅七番邸	大坂市東區高麗橋二丁目六十七番邸	攝津國八部郡與平野村百三十二番邸	神戸市坂本村番外四十八番邸	



